

Title	有理数体上の4元数環の基底と極大整数環
Author(s)	伊吹山, 知義
Citation	数学. 1972, 24(4), p. 316-318
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/3060">https://hdl.handle.net/11094/3060</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

### 有理数体上の4元数環の基底と極大整数環

伊吹山 知義 (東大理)

有理数体上与えられた偶数個の素点が分岐する4元数環, およびその1つの極大整数環の基底を具体的に求めてみた. 本質的には新しい内容を含むものではないが, このようにはっきりと述べてある文献も知らないで, 何かの参考になればと思い, 書きとめておくことにした. 結果は次の通り.

**定理.**  $\infty$  が分岐しないとき, 相異なる偶数個の正の素数  $p_1, \dots, p_r$  を指定するとき,  $m = p_1 \cdots p_r$  とおく.

$q \equiv 5 \pmod{8}$  かつ  $p_i \neq 2$  なる  $p_i | m$  に対して

$$\left(\frac{q}{p_i}\right) = -1$$

となるような正の素数  $q$  をとり,

$$D = \mathbb{Q} + \mathbb{Q}\alpha + \mathbb{Q}\beta + \mathbb{Q}\alpha\beta$$

$$\alpha^2 = m, \quad \beta^2 = q, \quad \alpha\beta = -\beta\alpha$$

とおくとこれはちょうど  $p_1, \dots, p_r$  のみが分岐する4元数環になっている.

$a^2 \equiv m \pmod{q}$  なる整数  $a$  をとるとき,

$$\mathfrak{D} = \mathbb{Z} + \mathbb{Z}\frac{1+\beta}{2} + \mathbb{Z}\frac{\alpha(1+\beta)}{2} + \mathbb{Z}\frac{(a+\alpha)\beta}{q}$$

が  $D$  の1つの極大整数環を与える.

以上で  $q$  の存在は Dirichlet の素数定理. また  $a$  の存在は,  $q$  のとり方より  $(m/q) = 1$  が容易(後述).

$\infty$  が分岐するとき, 相異なる奇数個の正の素数  $p_1, \dots, p_r$  を指定し,  $m = p_1 \cdots p_r$  とおく. あとは上記の  $\infty$  が分岐しない場合の条件のうちで, すべて  $m \rightarrow -m, q \rightarrow -q$  とおけばよい. すなわち,  $q$  は,

$$-q \equiv 5 \pmod{8}, \quad p_i \neq 2 \text{ に対して } (-q/p_i) = -1$$

を満足する正の素数

$$D = \mathbb{Q} + \mathbb{Q}\alpha + \mathbb{Q}\beta + \mathbb{Q}\alpha\beta$$

$$\alpha^2 = -m, \quad \beta^2 = -q, \quad \alpha\beta = -\beta\alpha$$

$$a^2 \equiv -m \pmod{q} \text{ で}$$

$$\mathfrak{D} = \mathbb{Z} + \mathbb{Z}\frac{1+\beta}{2} + \mathbb{Z}\frac{\alpha(1+\beta)}{2} + \mathbb{Z}\frac{(a+\alpha)\beta}{q}$$

注意 1. Hasse の定理より,  $\mathbb{Q}$  上の 4 元数環は,  $M_2(\mathbb{Q})$  を除いて, 上に与えたもの以外に存在しない. また類数 1 の 4 元数環, 特に不定符号 4 元数環では極大整数環は内部自己同型を除いて, 上のもので一意的に決まる.

注意 2.  $\mathbb{D} \supset \mathbb{Z} + \mathbb{Z}\alpha + \mathbb{Z}\beta + \mathbb{Z}\alpha\beta$

注意 3. 特殊な場合には, より簡単な基底のとり方がある. 例えば

$p \equiv 3 \pmod 4$  (素数) および  $\infty$  の 2 点が分岐するとき

$$D = \mathbb{Q} + \mathbb{Q}\alpha + \mathbb{Q}\beta + \mathbb{Q}\alpha\beta$$

$$\alpha^2 = -p, \beta^2 = -1, \alpha\beta = -\beta\alpha$$

$$\mathbb{D} = \mathbb{Z} + \mathbb{Z}\beta + \mathbb{Z}\frac{1+\alpha}{2} + \mathbb{Z}\frac{\beta(1+\alpha)}{2}$$

2 および  $\infty$  が分岐するとき

$$D = \mathbb{Q} + \mathbb{Q}\alpha + \mathbb{Q}\beta + \mathbb{Q}\alpha\beta$$

$$\alpha^2 = \beta^2 = -1, \alpha\beta = -\beta\alpha$$

$$\mathbb{D} = \mathbb{Z} + \mathbb{Z}\alpha + \mathbb{Z}\beta + \mathbb{Z}\frac{1+\alpha+\beta+\alpha\beta}{2}$$

ととることができる.

証明. 以下, 不定符号 4 元数環の場合のみ証明する. (定符号でも全く同様)

1.  $D$  が指定された分岐を持つこと.

Hilbert 記号を使えば簡単に検証できるが, ここでは直接証明する.  $\xi = x + y\alpha + z\beta + w\alpha\beta \in D$  に対して, (被約ノルム)  $n(\xi) = x^2 - my^2 - qz^2 + mqw^2$  とおく.  $D_p = D \otimes_{\mathbb{Q}} \mathbb{Q}_p \cong \xi_p$  に対して,

$$D_p \text{ が division} \iff n(\xi_p) \neq 0 \text{ for } \forall \xi_p \neq 0$$

(0) もちろん  $\infty$  は分岐しない.

(1) 一般に

$p \neq 2$  なら  $\mathbb{Q}_p(\sqrt{q})/\mathbb{Q}_p$  が不分岐 2 次拡大

$$\iff (q/p) = -1, (q, p) = 1$$

$p = 2$  なら  $\mathbb{Q}_p(\sqrt{q})/\mathbb{Q}_p$  が不分岐 2 次拡大

$$\iff q \equiv 5 \pmod 8.$$

よって上の  $q$  および  $p|m$  に対して,  $\mathbb{Q}_p(\sqrt{q})/\mathbb{Q}_p$  は不分岐 2 次拡大,  $m$  は  $\mathbb{Q}_p$  の素元だから, これらでできる  $\mathbb{Q}_p$  上の巡回多元環  $D_p$  は division である.

$\therefore p|m$  なら,  $D_p$  は division

(2)  $p \nmid m$  に対して,  $n(\xi_p) = 0, \xi_p \neq 0$  なる解,  $\xi_p \in D_p$  があることをいう.

$p \nmid m, p \neq 2, q$  で  $(q/p) = 1$  のとき,  $x^2 - q = 0$  なる  $x \in \mathbb{Q}_p$  がある.

$p \nmid m$  で  $p = 2$  または  $p \neq q$  かつ  $(q/p) = -1$  なら,  $m$  が  $\mathbb{Q}_p$  の単数,  $\mathbb{Q}_p(\sqrt{q})/\mathbb{Q}_p$  は不分岐 2 次拡大より, 局所類体論によって,  $x^2 - qy^2 = m$  なる解  $x, y \in \mathbb{Q}_p$  がある. よって  $p \nmid m, p \neq q$  のときは  $p$  は分岐しない.  $p = q$  の時, Hasse の和定理によって分岐しないことは以上よりあき

らかだが直接証明する.

$(m/q) = 1$  なら,  $x^2 - m = 0$  なる  $x \in \mathbb{Q}_p$  があるので分岐しない. よってこれを示す.

$p_i | m, p_i \neq 2$  の時

$$\left(\frac{p_i}{q}\right)\left(\frac{q}{p_i}\right) = (-1)^{\frac{p_i-1}{2} \cdot \frac{q-1}{2}} = 1$$

$$\therefore \left(\frac{p_i}{q}\right) = -1$$

$p_i = 2$  の時

$$\left(\frac{2}{q}\right) = (-1)^{\frac{q^2-1}{8}} = -1$$

よって

$$\left(\frac{m}{q}\right) = \left(\frac{p_1}{q}\right) \cdots \left(\frac{p_r}{q}\right) = (-1)^r = 1.$$

よって  $D$  はちょうど指定された分岐をもつ  $\mathbb{Q}$  上の 4 元数環である. またこれで  $a^2 \equiv m \pmod q$  なる  $a$  の存在もいえた.

2.  $\mathbb{D}$  が  $D$  の 1 つの極大整数環を与えること.

$\mathbb{D} \supset 1$ , また  $\mathbb{Z}$  上有限生成かつ  $D$  の  $\mathbb{Q}$  上の基底を含む. よって  $\mathbb{D}$  が整数環であることをいうには, 部分環であることをいえばよい. また極大整数環の判別式は, 一般論より,  $m^2\mathbb{Z}$  になるから,

$$\mathbb{D} \text{ が極大} \iff \mathbb{D} \text{ の判別式} = m^2\mathbb{Z}.$$

これらを

$$\mathbb{D} = \mathbb{Z} + \mathbb{Z}\frac{1+\beta}{2} + \mathbb{Z}\frac{\alpha(1+\beta)}{2} + \mathbb{Z}\frac{(a+\alpha)\beta}{q}$$

について確かめればよい.

	$\omega_1$	$\omega_2$	$\omega_3$	$\omega_4$
$\omega_2^2$	$\frac{q-1}{4}$	1	0	0
$\omega_2\omega_3$	$\frac{-a(1-q)}{4}$	$\frac{a(1-q)}{2}$	$\frac{1-q}{2}$	$\frac{q(q-1)}{4}$
$\omega_2\omega_4$	$a$	$-a$	-1	$\frac{q+1}{2}$
$\omega_3\omega_2$	$\frac{a(1-q)}{4}$	$\frac{a(q-1)}{2}$	$\frac{q+1}{2}$	$\frac{q(1-q)}{4}$
$\omega_3^2$	$\frac{m(1-q)}{4}$	0	0	0
$\omega_3\omega_4$	$-m + \frac{(1-q)(a^2-m)}{2q}$	$a^2 - \frac{a^2-m}{q}$	$a$	$\frac{a(1-q)}{2}$
$\omega_4\omega_2$	0	$a$	1	$\frac{1-q}{2}$
$\omega_4\omega_3$	$\frac{(q-1)(a^2-m)}{2q}$	$\frac{a^2-m}{q} - a^2$	$-a$	$\frac{a(1-q)}{2}$
$\omega_4^2$	$\frac{a^2-m}{q}$	0	0	0

$$\omega_1=1, \omega_2=\frac{1+\beta}{2}, \omega_3=\frac{\alpha(1+\beta)}{2}, \omega_4=\frac{(a+\alpha)\beta}{q}$$

とおく. 念のため前頁に表をかかげておく. 表の右側は左の数を  $\omega_i$  の 1 次結合で表わした時の係数を示す.

前表によって,  $a^2 \equiv m \pmod{q}$ ,  $q \equiv 5 \pmod{8}$  に注意すれば, これらの係数がすべて整数であることより,  $\mathfrak{D}$  は部分環であることがわかる. また,  $\text{tr}(\omega_1)=2$ ,  $\text{tr}(\omega_2)=1$ ,  $\text{tr}(\omega_3)=\text{tr}(\omega_4)=0$  に注意して,

$$(\mathfrak{D} \text{ の判別式}) = \begin{vmatrix} 2 & 1 & & 0 \\ 1 & \frac{q+1}{2} & 0 & a \\ 0 & 0 & \frac{m(1-q)}{2} & -m \\ 0 & a & -m & \frac{2(a^2-m)}{q} \end{vmatrix} = -m^2$$

よって  $\mathfrak{D}$  は極大整数環である. (証明おわり)

(1972年1月24日提出)